

【研究ノート】

初代伊藤忠兵衛の糸店開業と継承について

宇佐美 英機

はじめに

伊藤忠兵衛家伝来文書（約五万三千点余）に残されている初代伊藤忠兵衛直筆の書簡は、決して多くはない。しかし、この伝来文書は二〇〇三年夏に、筆者たちが滋賀県犬上郡豊郷町八目に所在する伊藤家旧邸（現・伊藤忠兵衛記念館）土蔵・物置などから発見したものであり、それ以前の文献でも閲覧・利用された痕跡は見当たらない。

筆者は、この伝来文書を整理する過程で見出した初代忠兵衛の直筆の書簡・葉書類九通、妻八重直筆の書簡二通を翻刻・紹介した^①。その目的は、初代忠兵衛と妻八重が二人の娘たちに宛てて認めた書簡に二人がどのような文面を記しているのか紹介し、その人となりを確認しようと試みたものである。

しかし、その後も史料整理を進めるなかで八重宛の書簡は二三通、八重から忠兵衛宛のものが一通あることを確認できた。また、忠兵衛から女婿の伊藤忠三宛の書簡も四〇通余残されていることも明らかとなった。これらの文面によって、忠兵衛が商品の仕入れにあたっている状況や家族に対する想いなど、これまで知られていなかった史実が具体的に明らかになってきた。もちろん概数ではあるが、伊藤忠兵衛家文書に

含まれる書簡は一万二百通、葉書二万六千六百通、書簡形式の商用状二千五百通あり、それらすべてに目を通した訳ではないので、忠兵衛や八重直筆の書簡が右に掲げた点数だけだと断言することはできない。あくまでも取り敢えず確認しているものと理解されたい。

ところで令和五年（二〇二三）は、初代忠兵衛の没後一二〇年にあたることもあって、史料館企画展を「初代忠兵衛と事業経営」のテーマで開催したが、その第Ⅳコーナーを「家と親の想い」と題して、すでに翻刻・紹介したことのある書簡四通を展示し、来館者の観覧に供した。これらの書簡は翻刻文を作成し、展示図録に挟み込んで配布した。また、配布した翻刻文に収めた他の二通は、これまで翻刻・紹介したことがなく、今回初めて展示したものである。

本稿では、このうち展示図録とともに配布した翻刻文の中の一通と、史料自体はパネル展示したが翻刻文を作成しなかった一通の印刷された披露文、およびそれらと関連する直筆の書簡や関連史料を紹介し、若干の解説を行うことにする。この際、取り上げる書簡は伊藤糸店の開業と継承に関わるものに限定することにした^②。

開業時の動き

伊藤糸店（以下、伊藤を略す。他店も同じ表記にする）が開店に向けた動きを見せたのは、明治二十五年（一八九二）中のことであった。その当時は、本店内に「糸方」を設けて店員を愛知県一宮町に派遣し、借家にて綿糸を仕入れるようになったようである。糸方は「一宮方」と「三池方」からなっていたが、同二十六年一月に行われたそれぞれの「仕

分勘定」によって、一宮方の純益一七二八円九〇銭と三池方の純益二一円一〇銭は本家備金として糸店から受け取るとされたようである。これらの外に「一宮糸方指引貸」や「本店付換かし」などが計上され、合計二万円となっている。もつとも、この合計値は正確ではなく実際は一万九百五十六円一銭であった。そしてこのうち一万四〇〇〇円が「忠次郎分家内」、六〇〇〇円が「源兵衛貸金」とされた。源兵衛への貸金は、四〇〇〇円は「預金分」、二〇〇〇円は「正貸分」とされている³。源兵衛への貸金の違いについては判然としないが、この後にも本家に利子を払い続けていることから推測すると、個人的な借入金であったのではないだろうか。それはともあれ、「忠次郎分家内」と記された金額は、同年三月に「糸店資本金」として『明治二十五年 掌許帳』に記帳されている。この記載箇所は、本家から貸付している人々と同じ所である。ただ、「糸店資本金」と項立てしているのは、当年だけである。

とはいえ、明治二十五年時の京店・西店の資本金（本家からの貸付）は、いずれも一万円（同二十九年時には一万五〇〇〇円）であることを見るならば、糸店は本店に次ぐ事業体として開設されたことが明らかであらう。

ところで、同二十六年三月二十日に次のような披露文が配布されている。この披露文は印刷されたものであることから、本店の取引先を中心に配布されたものと考えられる。

史料①

拜啓、春寒之候ニ御座候処、益々御清適之段奉賀候、陳者当店支配役源兵衛義、永年御愛顧ヲ蒙リ難有仕合ニ奉存候、然ルニ今回分家

忠次郎ニ内外綿糸商開業為致候ニ付、全人之ニ加ハリ該店ノ取締役ニ致シ候間、御取引ノ有無ニ不拘御厚情之程奉願上候、随而将来当店支配役ヲ良三ニ、支配次役ヲ与吉ニ為相勤候、兩人共若年ニ而不行届ナル者ニ候得共、何卒御引立之程伏テ奉希上候、先ハ右御披露申上度、如此ニ御座候、頓首

明治廿六年三月廿日

大阪本町三丁目

伊藤忠兵衛

すなわちここでは、本店の支配役であった（田附）源兵衛を取締役として転籍させたことを披露している。源兵衛が転籍した先は、忠兵衛が「分家忠次郎ニ内外綿糸商」を開業させた、その店であった。分家忠次郎とは、忠兵衛の長女である「とき（時）」の婿であるが、その忠次郎が「内外綿糸商」を営むことになり、同人を補佐する役として源兵衛を取締役に任じたことが判明する。ときと忠次郎が婚礼式を挙げたのは同二十四年十二月のことであったが、忠次郎が店主あるいは副店主として経営することになった店が、糸店（「内外綿糸商」）であったとみて間違いないだろう。

同二十六年一月に伊藤本店店法則³が制定された時、奥書に連署していたのは主人・伊藤忠兵衛、支配役・田附源兵衛（明治五年入店）、同次役・田中良三（同十年入店）、一等商務役・清水与吉（同十年入店）の四名であったが、店員序列の最上位にあった源兵衛を忠次郎を補佐させるために配置換えしている事実は、糸店の経営を忠兵衛が直接掌管する本店・京店・西店の三店とは異なる、別の経営体としたことを示してい

よう。そして、源兵衛の転籍にしたがい、店員序列の二・三位にあった良三と与吉をそれぞれ昇進させたのである。ただ、源兵衛が糸店に転籍した際、「取締役」となっているが、この職位名はその後の店法規定や各店のどこにも見当たらないものであり、職務内容がどのようなものであったのかはわからない。「取締役」名称としても初見であるが、いわゆる相談役、あるいは顧問役のようなものであったのだろう。源兵衛は、その後、同三十年に退店して大阪で染糸商を開業している。

それはともあれ、かくして糸店は、同二十六年三月に大阪市東区安土町二丁目五一番の地（二〇五坪一合四勺）に開店したのである。この家屋は、同二十五年七月六日に三八〇〇円で管半兵衛から買得し、同十八日に登記を済ませ、十月末には改築の造作を終えたようである。

ところで糸店の経営実態は、いまだほとんど不明である。最大の原因は、経営に関連する棚卸帳をはじめとする商用帳簿類が残されていないからである。現時点では、本家の資産管理帳簿の性格をもつ「掌許帳」「掌」に記された断片的な情報や書簡・商用状類を分析する以外に有効な手段がないのである。とりあえず「掌許帳」「掌」の記載を紹介しておこう。

「明治二十七年 掌許帳」では、同年一月改めで六〇〇〇円を本家から「預」っている。この金は翌年八月に返済している。同二十九年の「掌」によれば、本家は八月十二日に「利子」として三六円を受け取ったことを「雑損益」項に記載している。この利子が糸店資本金に掛かるものか、それ以外の借入金に対するものかは判明しない。同三十二年の「掌」には、二月一日に購入した英糸五〇俵・六六五〇円を十一月十六日に糸店へ七五〇〇円で「売却」して八五〇〇円の「益金」があったと記している。

この英糸を入手したのが本家なのか、どの店なのか明記されていないが、少なくとも糸店には原価で「売却」していないことは明らかであり、伊藤家にとつての糸店は、他の取引先と同じような取り扱い対象であったことを示していよう。

明治三十三年の動向

明治三十三年の「掌」には、「糸店当座貸」の項に「貸」とする金額が記されている、それらは十月二十七日・三五〇〇円、十一月二十日・六〇〇〇円、同二十一日・三〇〇〇円、同二十四日・七五〇〇円、合計二万円である。また、「糸店臨時貸」の項にも十二月三十一日・一万円とある。いったい明治三十三年に糸店は、どのような経営に陥ったのだろうか。そのことに関連するのではないかと思われるものが次の書簡である。

史料②

昨夜来案るに、全資産を遣り候結果も今更惜くも無之、然二一月以来十月中之營業上利益金ノ内ヨリ、店法則ニより店員ニ配当をなさざるへからず、此間店卸ニも此配当を顕し候て正當ノ事ニ有之候、然ハケ様ノ結果ニは相成不申と存居候ハ、此辺思ひつゝ、注意も致さず候処、昨夜之報知ニ依れハ、店員配当までも持帰り候事ニ相成候、是にてハ忠二郎店員対し甚以不宜候、何卒御両所様ニ此事御咄し被下、店員助ケ之為と思召、御勞を願度、尤忠印ニも店員ニ於テ罪なきものに、右仕事ニすは相成てハ不宜□わかり切たる事ニ

候、誠ニ此上御両所ニ一言ニても余計の咄しを願ハ、実ニ^②不好事候得共、此事のみハ相願度候、扱右糸店営業上利益も一月ヨリ十月中三万五千円カ四万円までと存候、配当高ハ百分ノ二以内ナリ、尤此不仕合ノ成行故、十分ニ店員ニやり不申共宜、又ハヤラズトモ仕方のナキコトナレトモ、スル結果ニ及ひては、右ノ減して左ニあたへ度（尤ヤル筈ノ金額）、まづ右申上候

御両所様別段書状御出不申、宜申上候、以上

老

忠三殿

良三殿

右の書簡は年月日が記されていないため、断言は避けざるを得ないが、文中に店法則・店卸・配当について触れていることを考慮すると、明治二十六年一月制定の伊藤本店店法則の規定をもとに発言していると考えてよいだろう。その規定によれば、店卸勘定は十二月三十一日であるが、仮店卸勘定は七月二十一日から三十一日の間に実施することになっている。文中では一月から十月までの利益を推測していることから、仮店卸勘定を済ませ最終店卸勘定を実施する期間のことで、おそらくは十一、十二月の頃のものであろう。

店員配当に関しては、伊藤本店店法則の規定では、純益の十分の二が店員配当に充当されることになっており、忠兵衛が「百分ノ二以内」とするのは書き違いであるか、または非常事態なので通常の十分の一に減額するという意味なのだろう。とはいえ、忠兵衛は「不仕合」な状況にあっても、忠三（二女こうの婿）と良三を頼りに、できる限りは「ヤル

筈ノ金額」を糸店店員に配当してやりたいと願っていたことが伝わってくる。問題は「不仕合ノ成行」とは何であったのかということである。これもまた文面によれば、店主の忠次郎が「店員配当までも持帰り候事ニ相成」ったことだろうと見当がつく。それは、書簡の冒頭に記されているように「全資産を遣り候結果」なのだろう。すなわち、忠次郎は糸店の資産（現実としては資金）を持ち帰ったということなのであろう。このような仕儀は、罪のない糸店店員に対して不実な行為だと言わざるを得ない。それではなぜ忠次郎がこのような仕儀に至ったのだろうか。

忠次郎が伊藤家から原籍の鈴木家に復籍したことに關しては、いまだその正確な原因は判明していない。ただ明らかなことは、明治三十三年十一月十六日付けで忠次郎・ときが大阪安土町から犬上郡豊郷村字八目所在の一二三番屋敷（廢家）に住所移転している。また同日に、孝太郎ら子供は一二番忠兵衛屋敷に入籍した。そして、翌十七日に忠次郎・ときは協議離婚し、忠次郎が除籍されている。

このように、糸店店主であった忠次郎が退店するに至り、店の存続に關して慌ただしい動きが生じるようになった。先述のように、十月二十七日以降年末までの間に本家から三万円にのぼる資金が貸し付けられている事態は、糸店の存続に關わる事態を生じさせたのである。

初代忠兵衛は、とき一家の家計を助成する意図で糸店を開設したのだと思われるが、店主が不在となるに至ってもこの店を存続させる意志が強かったようである。次の史料は、そのことを明らかにしている。

史料③

扱、将来名前之義、元より孝太郎之ツモリ候処、同人名義ニテモ許

可相成兼候よし、少し合点参り不申候、孝太郎カ戸主ナルトキハ未
丁年ニセヨ、戸主ノ名ニテ開業シ、後見人ハ尤アルコト故、許可ニ
相成候様ニ被存候

一応時ノ名ニテ開業トシ、一ヶ月ヲ経て孝太郎ニ譲ルモ別段さし聞
ハナキコトナレトモ、度々名前前換のみニて取引先ニ対しても不宜候
故、最初カラ孝太郎ニ致度、夫レカ出来ス、時名前ニて開業スルコ
トナレハ、孝太郎ニ譲ルコトハ両三年不可然ハセヌ方ガ宜存候、
此辺御両所様御相談被下、且乾又ハ東区役所係員ニ表面御相談被下
て可然存候、何分落着之上ハ、早々此運びニ移り候コト故、日子も
無之候得ハ、精々手廻し置被下度候、成丈孝太郎名義をニ致度候コ
トナリ、

落着ノ上ハ直ニ御上京被下候カ、別段御上京ノ用向ナクハ、如何様
ニても可然候、拙者ハ帰須かけ大阪ニより候事と存候ナリ、可相成
ハ御上京被下度候、十七日中ハ田中^マや、十八日^{京都}紅^カかと存し居候ナリ、
まつ右申上也

十五日夜

老人

御両人

この書簡は日付から、正式な離婚が成立する直前に忠三と良三に宛て
たものである。文面から忠兵衛は、娘夫婦の離婚にともなつて糸店を
どうするか決断を迫られていたが、自らは孫の孝太郎を店主としたい意
向であった。しかし、この時点では孝太郎は幼すぎて、戸主としては役
所から認められそうもなかったようである。そこで、二案としてはとり
あえず娘の時名義で店を存続させ、二、三年後に孝太郎に名義を換える

ことを願つたのである。孝太郎名義による糸店営業に関しては、後述の
ように親族会の開催を大阪区裁判所から求められたようで、早急にその
手続きに取りかかったことが次の史料から読み取れる。

史料④

廿一日付書状承引致候

親族会ノ届ケハ豊郷役場ニは関セザル

只大阪ニ於テ営業上

ニ付ての事までと存候、

一寸心得の爲ニ伺候コトナリ

一、親族会人名ハ三名以上有之

誰をするか 忠兵衛ハ加ハルコトカ、加ハラザルコトカ

忠兵衛加ハラザルコトスレハ、其三名、田付政二郎^マ殿ニ一名相
頼、後二名可然人ヲ撰定被成、運^マひを早々調印之運^マひニセラザル
ヘカラズコトナリ、可相成ハ甚五郎ト藤野惣二郎両人在坂故都合
宜候ヘ共、実印所持如何と存候

一、開業届ヲ先ニしてさし聞エナキコトナレハ、直ニ開業届ナス事

宜候、しかし一両日ノ事ナレハ順序相踏候方可然候

一、中牟田御主人上京被相成、丁度宜候、本日当宿ニて会合致候、

拙者明日中、明後日ノ帰坂位と存候、いつれも本人退去ノ上ノ事、

電話之技^{（飛カ）}ヲ得タル上ノ事も、田中氏と打合し「」コトナリ

右、着□本□運方速ニヤリ被下候

廿六日

父

忠三殿

右の書簡によれば、二十一日付けの書簡を忠三から受け取っていたようで、そこに記されていたことを了承している。内容を具体的に記した忠三からの書簡はまだ確認できていないが、親族会の届を豊郷町役場に提出する必要があるのかどうかを伺っていたのだろう。忠兵衛は、この件は大阪における営業上のことなので豊郷町への届けは不要と考えていたようである。

忠兵衛が「開業届ヲ先ニしてさし問エナキコトナレハ、直ニ開業届ナス事宜候、しかし一両日ノ事ナレハ順序相踏候方可然候」と記す文面は、糸店を存続させる思いが強かったことが反映されている。また、親族会開催メンバーは三人以上が必要だとすれば、自らが入らない場合は、信頼する甥の田付政二郎（田附政次郎）に依頼し、他の二名として田附甚五郎（義甥）と藤野惣（宗）二郎（義甥力）が在阪中なので都合が良いが、実印を所持しているかどうかによると述べるのは、とにかく親族会議を一刻も早く開催し、決議書に署名・捺印してもらいたかったであろう。それゆえ、在阪する親族に会議メンバーとなってもらうことを願う姿にはいささかの焦りが感じ取られる。

結果として親族会議には、田附政次郎や甚五郎は入らなかったようで、伝来する決議書は次のように作成されている。

史料⑤

（表紙）

「親族会決議書

伊藤孝太郎

」

親族会決議書

大坂市東区安土町貳丁目

五拾壹番地平民

戸主 伊藤とき

長男 伊藤孝太郎

明治貳拾八年拾月貳拾八日生

右伊藤孝太郎未成年ニテ单独営業不能ニ付、大阪区裁判所明治参拾参年（非）第貳壹参壹号親族会招集決定ニヨリ、明治参拾参年拾貳月拾日午前拾時、裁判所指定ノ伊藤孝太郎住所ニ親族会ヲ開設シ、左ノ事項ヲ決議ス

一親権者伊藤ときハ未成年者伊藤孝太郎ノ為メニ、大坂市東区安土町貳丁目五拾壹番地ニ於テ認糸商営業ヲナスコトニ同意スルコトヲ決議ス

右之通候也

明治参拾参年拾月拾日

伊藤孝太郎親族会員

大坂市東区本町参丁目

八拾四番屋敷平民

伊藤忠兵衛（印）

滋賀県犬上郡豊郷村大字四十九院

拾七番屋敷平民

同県同郡同村大字八目

拾六番屋敷平民

伊藤長兵衛（印）

右の親族会決議書によれば、忠兵衛と本家の長兵衛は署名・捺印しているが、一名は住所だけであり署名者が記されていない。住所表記から判断して、こゝは八重の実家と思われるため、戸主の藤野宗二郎が署名・捺印したものと思われる。正本は大阪市東区役所と大阪区裁判所のいずれかに提出されたと思われるが、それには藤野宗二郎が署名・捺印していたのではないだろうか。

結びに代えて―糸店存続のその後―

右に見てきたように、糸店の存続は親族会決議書の作成によって、伊藤とき名で「総糸商営業」を行うこととして継続が決定した。これに付随して忠兵衛は、糸店店法則の制定を急いでいた。その素案作成から修正・完成過程については、注(2)に記した拙稿に記しているため、ここでは省略する。もっとも、忠兵衛が三十日に忠三に宛てた書簡では、正月五日頃に上阪して、直ちに糸店の年始会を開催し、その上で店法を發布したいと知らせている。他方で忠兵衛は、糸店店法則作成の途中で、店法は「五日午前中ニ仕上ケ被下候」と指示していることから、糸店存続と糸店店法制定作業が短日の間で進められたことが明らかであろう。

しかし、実際は存続することになった糸店のその後の状況はどうであったのだろうか。忠兵衛が亡くなるまでの状況について明治三十四年以降の「掌」帳の記述をもとに簡略に述べることにする。

「明治三十四年 掌」の「糸店当座」の項によれば、糸店は三月八日に五〇〇〇円を借り、六月三十日改めで右の利子は一六二円四〇銭であった。七月八日にも一万円を本家から借り、十二月二十三日現在で二口の

利子は七二四円九〇銭であった。これらは次年度に繰り越されている。

「明治三十五年 掌」では、六月三十日に新たに二万円を借り、十月六日に一万五〇〇〇円を返済した。これにともなう利子は、上下半期合わせて一七八九円となった。この記載に続けて糸店の「別口」が記録されているが、それによると四月二十六日に七二九〇円、同二十八日も九九四五円を借り、五月一二・五・七日に四〇九五円を返済している。ただその直後の五月十日に五一七五円を借りている。したがって、別口と利子も含めると四万円余が次年度に繰り越された借入金となったのである。

忠兵衛が亡くなった明治三十六年の「掌」には、糸店の借入金の記録がなく、再び記録されるのは同三十八年になってからである。そこでは八月十七・二十一・二十四日に計四万円を借りて十月十二・十六日の二回で返金したことがわかる。これらの借入金にかかる利子は四七九円六〇銭であったが、これは返金されなかったようである。

このように、糸店の経営は忠次郎店主時代の実態は判然としないが、存続問題に揺らいでいた頃には本家からの資金の貸し付けを受けなければ維持できなかったと思われる。初代没後も本家による助成が行われたことは、二代忠兵衛が「糸店時代の経営困難は想像以上で、明治二十六年から四十一年合併するまで、前後五、六回は新たに資本金を全部つぎ込み、なお何倍かの不足分の援助をした。それほど綿糸商なるものの営業は危険であり困難であったことを聞き、かつ自分も体験した」と語っていることから明らかである。

このように、糸店の経営は決して順調に維持されたわけではなかった。しかも明治三十三年以降は、業務になれないときが戸主として位置

づけられたこともあって、運営には資金的にも困難が続いたようである。二代忠兵衛が本部制を導入した際に、糸店を統合して経営に乗り出すようになるのは、もったもな事だと思われる。後に旧伊藤忠商事(株)が糸店の業務を継承して事業経営を展開させることになるが、糸店創業からの営業の実態や組織の再編などについては、まだ十分に解明できてはいない。今後の課題として残さざるを得ない。

最後に伊藤家を買得した地籍に関して補足しておきたい。安土町二丁目二九番地(一二三坪七合四勺)を一万二六八円八八銭で本家を買得したことは、明治三十五年「掌」の「家屋敷地所所有」項に確認できる。ところが同地籍は、明治四四年の地籍台帳^③によれば、所有者は「伊藤とき」となっている。同町五一番地も「伊藤とき」名である。ただし、所有者住所はいずれも「本町三」とある。同台帳の三〇・三一・三二番地は「滋賀県犬上郡豊郷村」の「伊藤忠兵衛」が所有者となっている。後年の伊藤忠商事本社は五一番地にあり、二九・三二番地には伊藤忠合名会社や伊藤忠商店が占めた。それゆえ、五一番・二九番地がどのような名義変更されるのかについては、二代忠兵衛時代の事業経営体の組織替えの過程を解明する必要があるが、それらの検討もまた今後の課題として残されている。

注

- (1) 拙稿「初代伊藤忠兵衛と妻八重の娘宛の手紙」(滋賀大学経済学部附属史料館『研究紀要』五十号、二〇一七年)
- (2) 糸店に関わっては、すでに別稿「伊藤糸店の店法草案」(『研究紀要』四五号、二〇二二年)、および「伊藤糸店店法則再考」(『研究紀要』五三号、二〇二〇年)でも論じており、本稿と重複する点もあるが参照願いたい。

- (3) 「明治二十五年 掌許帳」
- (4) 拙稿「伊藤本店店法則」(滋賀大学経済学部ワーキングペーパー第二七〇号、二〇一七年)
- (5) 「明治二十五年 掌許帳」。
- (6) 拙著『初代伊藤忠兵衛を追慕する―在りし日の父、丸紅、そして主人―』一〇四～一〇五頁(清文堂、二〇二二年)
- (7) これらの様子は、『伊藤忠商事100年』二三・二四頁(伊藤忠商事株式会社社史編集室、伊藤忠商事株式会社、一〇六九年)にも簡略に叙述されている。
- (8) 宮本又郎監修『地籍台帳 地籍地図(大阪)』第五卷台帳編(柏書房、二〇〇六年)参照。

【付記】

本稿は、(一財)伊藤忠兵衛基金・二〇二三年度文化厚生事業助成による研究成果の一部である。